

究でできる、実に奥の深いもの。なぎなたを学ぶすべての人々が、私が感じたような幸せな気持ちを味わえるよう願ってやみません。

私は戦前の薙刀術教員養成所に始まり、戦中、そして戦後の復興期を経て、現在までなぎなたと関わる人生を送ってきました。その長い年月の中で、実に多くの先生方に教えを受け、さまざまな出来事のなかからいろいろなことを学んでまいりました。

なぎなたと歩んだ日々の中から、流儀のこと、修行のこと、そして出会った多くの方々のことなどを振り返り、綴^{つづ}っていくことにします。この書物が、なぎなたのすばらしい世界を少しでも多くの読者の皆様に知っていただくための一助になれば、私にとってこれほど嬉しい^{うれ}ことはありません。

二 故郷、そして家族

私の郷里は、東北地方の宮城県、栗駒山の麓^{ふもと}にあります。宮城県北部、栗原郡志波姫村^{しわひめ}が私の生まれ育った村で、現在は志波姫町という地名になっています。少し南には白鳥飛来地として知

られる伊豆沼が広がり、西には栗駒山が美しい山裾すそを広げています。私が生まれ育った場所は、そんな自然の恵みの豊かな所でした。

私の実家は「千葉」といい、父は金治という名前でした。祖父の代から大工で、父も、上の弟も大工で生計を支えておりました。家には父と母、祖父と祖母、そして妹、二人の弟がいて、八人家族ということになります。いまでは大家族ということになるでしょうが、あの頃はごく普通の家でした。

千葉という姓はこの地域には多く、北辰一刀流の千葉周作先生も近くの花山村の生まれということですが、私の家と関係があったかどうかはわかりません。ただ、昔、千葉という者が志波姫に移り住んできて、その人がたいそう大きな人で子孫を大勢残した、という民話が伝わっています。そういえば直心影流薙刀術の園部秀雄先生がお生まれになった岩出山村も、やはり栗駒山の麓の村で、志波姫村とは隣村のような場所にあります。詳しく調べたわけではないのですが、武道で名のある先生方がこの地方に何人も出ており、昔から武道が盛んな土地柄だったのかとも思えます。また、同じなきなたという武道を歩んだ者として、何となく嬉しい気持ちがいちます。

私の祖父は宮大工を生業とした人で、神社やお寺などの建築に携わったと聞いています。難し

い数字をいっさい使わず、丸や三角を書き並べただけの図面を引いて、一本も釘くぎを使うことなく立派な家を建てたということです。祖父は志波姫や若柳でたくさん家を建築しており、いまでも若柳の街には、祖父が建てたという立派な家が残っています。

子供の頃、私の家には祖父の弟子が何人も住み込みで大工修業をしており、ずいぶん賑にぎやかだったことを覚えていません。お弟子さんは岩手の方から来ている人が多く、みんな素朴で一所懸命仕事をしていました。雪がたくさん降った日などは、若い兄さんに学校までおぶって連れていってもらったことを覚えています。

祖父はおもしろいことをよく言う人で、ずいぶん私を可愛がってくれました。あの頃は少し大きくなれば母の仕事を手伝うのが当たり前のことでしたが、母が私に何か手伝わせようとすると、祖父は「おまえは手習い（勉強）をしなさい」といって家の仕事をさせませんでした。母も祖父の言うことには逆らえませんでしたから、私は小さい頃に母の仕事の手伝いをした記憶があまりありません。

祖母は母屋の隣の離れに住んでおり、祖母は家の角をお店にして小さな商売をやっていました。当時は「一銭商い」と呼んでいましたが、お菓子や雑貨など小さな物を扱うお店で、祖母はのんびり、商売というかお店番をしていたように覚えていません。

母はとても働き者で、家の中のこまごまとしたことを一人で切り盛りしていました。私

に仕事を手伝わせようとしても、祖父に止められてしまうものですから、ずいぶん大変だったと今にして思います。当時はお弟子さんがたくさんいたわけですから、仕事の量も並大抵ではなかったでしょう。しかし、母はお弟子さんが独り立ちするときは必ず紋付きと袴を仕立てて用意し、熨斗紙を添えてお祝いとしてあげていました。

「どうして、一人ひとりにあげるの？」

と私が尋ねると、

「今までは親方に教わる立場だったけれど、これからは独り立ちして教える立場になるんだよ。だからお祝いしてあげないとね」

母は、嬉しそうにそう言っていました。

父の仕事を支え、忙しそうに家事に明け暮れる母でしたが、本当は髪結いか小説家になりたかったのだそうです。当時、髪結いといえば女の人が自立して働ける数少ない職業であり、また女流小説家が活躍していた時代でもありました。あの時代、自立した仕事を求める女の人はそう多くはなかったと思います。母は田舎住まいながらもハイカラな心を持っていたものだと思います。

父は祖父の後を継ぎ、大工として仕事をしていました。祖父と違って宮大工はしていませんで

したが、祖父譲りの仕事ぶりで大工としての評判は上々だったようです。後に上の弟の昇治も大工になりましたが、父は

「一所懸命に立派な家を建てるものだから、大工は損ばかりして儲からない」

と言つて、弟の息子には大工を継がせませんでした。父も弟も、分かっているながら仕事に手は抜けない。そんな誠実で頑固な祖父の気性を受け継いでいたように思います。

父は仕事ぶりこそ実直でしたが、私たちにはよく冗談を言う、明るく楽しい人でした。子供の時、悪友たちと西瓜すいかを取りに行ったときの話をよくしてくれました。そのころ、西瓜はまだ珍しく、父をはじめ悪友の誰もが食べたこともなかったそうです。「一度食べてみたい」ということで西瓜畑に忍び込み、一つ失敬してきました。けれども、誰も食べ方を知りません。誤って地面に落としたところ、中から真っ赤な果肉が出てきて、全員びっくりして捨ててしまったそうです。そして残りの部分、つまり皮ですが、これをたべたところ全然おいしくない。西瓜というのは、なんてまずいものなんだと思つて家に帰つた、と話してくれました。父の話があんまりおかしいので、家族みんなで大笑いしたのを覚えています。

私が京都へ行き、上の弟が大工を継ぐようになった後のことです。弟が父を誘つて、北海道へ

行ったことがあります。父は帰ってくると、

「昇治にだまされて、家を一件建ててきちゃった」

と笑いながら言ったそうです。

このとき、弟は帯広に移り住んだ親類に頼まれて家を建てることになっていたのですが、一人では自信がなかったので、「北海道へ遊びに行こう」と父を連れ出し、現地で一緒に家を建てたのでした。帰ってきてから、

「いやあ、参った、参った」

と笑う父につられ、みんなで大笑いしたということです。そんな暢気なところのある父でした。

私は、働き者で明るい家族に囲まれて、幸せな少女時代を過ごしました。冬は下駄かすがいに打ち付けてもらい、氷が張った田圃たんぼの上を滑って遊びました。父は下駄に打ち付ける鋺なべをヤスリで削って滑りやすくしてくれました。弟はまだ小さいのでスケートを作ってもらえず、私の後ろを藁靴わらぐつを履いてついてきたのが、今でも思い出されます。また、夏は近くの鉾山へ遊びに行つて、弟や妹と一緒にトロッコに乗って遊びました。今から思えば、ずいぶんとおてんばな遊びばかりしていたのかもしれない。

母の実家は岩手県の岩ヶ崎という所にあり、昔は鶴丸城というお城のあった城下町でした。実家は「佐藤」という家でしたが、たいそう大きな農家で、東小路の佐藤といえは岩ヶ崎では有名でした。母には與十郎むじゅうろうという兄がいて、岩ヶ崎の家に住んでいました。私も父や母に連れられてよく遊びに行きましたが、ずいぶん大きく立派な家だったのを覚えています。

母屋の裏は大きな広場になっていて、物置小屋には立派な竹の胴や竹刀などがたくさん置いてありました。私は剣道のことなど何も知らなかったものですから、これを使って何をするんだろうと疑問に思ったものです。大人たちに聞いてみると、あれは伯父の與十郎が撃剣をするのに使うものだと説明してくれました。「撃剣」とは聞き慣れない言葉ですが、伯父の家では剣道とは言わず、撃剣と呼んでいたのを印象深く覚えています。與十郎伯父は岩ヶ崎の高橋義右衛門という先生に剣術や柔術を習っていて、町の人たちとよく撃剣を楽しんだと聞いています。

お盆の前には子どもたちが集まり、この広場で流し焼きをして食べました。それが楽しくてよく伯父の家に遊びに行きました。流し焼きとはメリケン粉に黒砂糖を混ぜて鉄板で焼いて食べるもので、お菓子の乏しかったあの時代、子どもはみんな喜んで食べたものです。

この日は、近所の男の人たちが集まり、広場で撃剣の大会を行いました。元氣な男の人たちが、面や胴を身につけ、竹刀を取って打ち合います。「エイッ！、ヤー！、トウッ！」と勇まし

い気合をかけながら、竹刀と竹刀がぶつかり合います。互いに打ちつ打たれつ、自由な動きで攻防をする、その様は女の私が見ても勇ましく、胸が躍るような気持ちになったのを覚えています。ただ、従姉妹の娘たちはあまり撃剣をおもしろがらなかったたので、私は少し変わっていたのかもしれない。何度か撃剣の様子を見ているうちに、私もやってみたくなりました。竹刀を手にとって、思いつきり打ち合いたくなったのです。母に向かって、

「私も撃剣をやってみたい」

と言くと、

「あれは男がするものだ。竹刀は固いし、お面やお胴をつけていても、打たれたらとても痛いもんだよ。おまえは、何で頭を叩かれるのが好きなのか。絶対にだめだ」

とひどく反対されました。私は我慢するしか仕方ありませんでしたが、今思えば、この頃から武道というものに強い興味を持っていたのだらうと思います。

與十郎伯父は、いつも背筋がすっと伸びた、立派な体躯の人でした。このように武道が好きで、剣術や柔術を修行して、近くの人たちとよく撃剣を楽しんでいました。與十郎伯父は、岩ヶ崎の人たちからは「佐與さん」と呼ばれていて、人望が厚かったようです。「町で何かあったら佐與さんに頼め」といわれ、人の困り事の相談や仲人役をずいぶん引き受けていたということ

す。そんな與十郎伯父ですから、私に対しても何かと面倒をみてくれ、ずいぶん可愛がってもらったことを覚えています。後に薙刀術教員養成所へ入所するときも、この伯父が両親の説得にあたってくれました。そういう意味では、與十郎伯父がいなかったら今の私はなかったかもしれない。

また、與十郎伯父が擊劍のお相手をした方々とも、後に京都で関わりを持つようになるので、人の関わりやご縁というのは、本当に不思議なものだと思います。

三 多感な少女時代

勤勉で優しい両親や弟妹たち、そして擊劍に打ち込んだ伯父の影響を受けながら、私は多感で活発な少女時代を過ごしました。祖父が「家の仕事をする時間があったら、手習い（勉強）をしろ」と言うので勉強もしましたが、弟を連れて外を遊び回るのが何より楽しかったのを覚えています。

幸せな子供時代だと思っていますが、一度だけ「死のう」と考えたことがあります。あれは、七夕祭りの日の夕方でした。もう、何が原因だったのかよく覚えていないのですが、家族の者に